

体験記

さぎ さか ふみ あき

鷺坂 史明さんへの インタビュー



©日本ユニセフ協会/Fumiaki Sagisaka

日本ユニセフ協会では、「国際協力人材養成プログラム」の一環として、大学院生を対象に、ユニセフの支援現場の最前線で、インターンとして働く海外インターン生派遣事業を行っています。今回、シエラレオネから帰国したばかりの鷺坂さんに、海外に興味をもったきっかけや、現地での生活について伺いました。

Q 子どものころはどんな子どもでしたか？

A 岩手県盛岡市で生まれ育ちました。勉強はあまり好きではなく、いたずらが大好きで、いつも両親や学校の先生に迷惑をかけていました。中学生の頃から英語が好きで、洋楽や英語の有名なスピーチを聴いて真似をしていました。15歳の夏にボーイスカウト活動で初めて海外に行き、英国で開かれた国際キャンプに参加しました。世界各国から集まった同年代の仲間と協力して10日間のキャンプをした経験は、それまで日本で日本人の友達しかいなかった私にはとても新鮮でした。このキャンプ以降、積極的に海外派遣や国際交流活動に参加するようになり、いつか海外の人と一緒に仕事がしたいと考えるようになりました。

Q 海外インターン／国際協力に興味を持った理由

A 子どものころからユニセフ募金を通して、世界には助けを必要としている貧しい国に暮らす人びとがいると両親から聞かされていました。高校生のとき、ボーイスカウト活動でフィリピンのスラム街に暮らす子どもたちの支援をしたのですが、これが私にとって初めての国際協力につながる活動でした。大学三年生のとき、自分がやりたいこと・貢献したいものが本当に自分にあったものであるのか確かめたくなり、大学を一年間休学して、東アフリカ・ケニアの農村の中学校で社会科教員として働きました。電気・ガス・水道のない村で過ごしたこの期間は、毎日がとても新鮮でした。

ある日、学費が払えずに村の小学校を退学した女の子が私の暮らしていた家で開かれている読み書き教室に来たのですが、その帰り道に、近くにいた学校に通う子どもたちに学校をやめたことをからかわれ、いじめられている場面に遭遇しました。泣いているその女の子を見たとき、それまで様々な場面で感じていた貧しいことに対する「かわいそう」という共感よりも、「このままではいけない、なんとかしなければいけない」という熱い思いがこみ上げて来たのを覚えています。

この出来事以来、学校に行きたくても行けない人をなくし、みんなが（性別、所得、言語、宗教、その他の出自や属性によらず）自由に生き方を選べるような教育を受けられるようにしなければいけないと強く考えるようになりました。その後、日本とイギリスの大学院でアフリカの教育分野を専門に研究を進めてきましたが、研究

によって身につけた知識を生かして、アフリカの地でアフリカの教育に向き合いたいと考え、海外インターンに応募するに至りました。

Q 今回のインターンで一番大変だったことは？

A ユニセフシエラレオネ事務所では、100人程の職員が人口約600万人のシエラレオネの保健、衛生、教育、人権保護など、多分野に渡る業務を行なっています。そのため、スタッフ一人ひとりが限られた時間で大きな成果を出すことが求められます。もっともつらく感じたのは、自分の能力、知識、理解力不足により取り組んでいたプロジェクトの進捗が遅れたときです。上司に「一つのプロジェクトの進捗の遅れは、シエラレオネの教育の発展とシエラレオネで暮らす子どもたちの将来に影響する」と指摘されたとき、ユニセフの仕事には責任感と緊張感を持って取り組む必要があること改めて痛感しました。

Q 今回のインターンで一番うれしかったことは？

A インターン期間中、教育関連のプロジェクトの実施状況を調査しに地方出張へ幾度か行き、学校を訪問したり、地域社会の会合に出席したりしました。その際に、生徒の保護者や学校の先生から「ユニセフのおかげで学校へ通えるようになった、どうもありがとう」「ユニセフのおかげで学校にきれいなトイレができた、どうもありがとう」と感謝の言葉をかけてもらいました。自分の行っている小さな仕事が、ユニセフという大きな組織を通して、人に感謝される成果を出していると実感できたとき、嬉しく、またやりがいを感じる事ができました。

Message 日本の子どもたちに一言

常に視野を広く持つことをお勧めします。自分が今行っていることに集中しすぎて「井の中の蛙大海を知らず」とならないよう、見聞きしたことがないこと、体験したことがないことに積極的に取り組んでほしいです。世界は広く、興味深いことで溢れていますので、ぜひ色々なことにチャレンジして、視野を広げてみてください。